

巻 頭 言

70周年記念号に寄せて

『ノウハウ』

執行役員 浅井 貴史



『2020年』当社が創立70周年を迎える記念の年に、第52号電興技報の巻頭言を担当することとなり、身の引き締まる思いです。創業以来、当社は諸先輩方の功績により、長きに亘り日本又は海外の通信インフラ構築に貢献してきました。当社がこの先100年を超え永続していくためには、現在の開発力や技術力を如何に詳細に効率良く、次世代に引き継ぐかが重要な要素であります。そのための一助となるのが、この電興技報ですが、読んで伝えられないモノもあります。それは、私をもっとも重要と捉えている『ノウハウ』です。

『ノウハウ』[know-how]とは？

物事のやり方についての蓄積された実際的知識、技術情報（広辞苑より）

広辞苑の説明内容でとらえると、文書でも伝えられそうなイメージを持ちますが、国際商業会議（ICC）の定義によると「暗黙知であり、話を聞いたり書物を読んだりしただけでは伝承することができないもの」が『ノウハウ』と表されており、この暗黙知を如何に上手く伝えるかが重要となります。例えば自転車に乗る方法を文書化して、人に教えることが出来るでしょうか？いくつかのヒントは教えられるかもしれませんが、こうすると必ず乗れると表すことは難しいと考えます。このような自転車に乗るコツであったり、長年の経験による直感や勘といったような暗黙知を継承できないと、企業が持っている『ノウハウ』がいつしか喪失してしまいます。

よって『ノウハウ』を継承するためには、この暗黙知を形式知化（文章や図表、数式などによって説明・表現できる知識のこと）することが1つの手段となります。出来る限り細かな点についても文書化し、また文書化だけで伝わり辛いのであれば、音声や動画などを活用することも有効と考えます。しかしながら先程述べた直感や勘、コツといった内容は形式知化することが困難です。人から人へ「コツ」などを伝えるには、やはり一緒に仕事を進めながら、共感やコミュニケーションで伝えていくことも大事と考えます。

『ノウハウ』の継承はとても難しいテーマですが、企業がやらなければならない最重要課題です。先ず我々にできることは、この『電興技報』のように開発内容を文書化するに留まらず、その開発成功に至った経緯や要因、また失敗事例などを解り易く記録として残していくことです。

諸先輩方から私達へ、私達から次世代へ、会社で培ってきた『ノウハウ』を繋いでいき、開発力・技術力の更なる向上に努め、会社永続を目指していきましょう。